毛主席の五篇の著作

万国のプロレタリア団結せよ!

毛主席の五篇の著作

★

外 文 出 版 社

北 京

出版者のことば

本版の『毛主席の五篇の著作』は、一九六七年十二月に北京人民出版社から出版された中国語版の原文にもとづいて翻訳したものである。

毛澤东

目次

人民に奉仕する……1
ベチューンを記念する……7
愚公、山を移す……15
党内のあやまった思想の是正について……27
軍事一点ばりの観点について……29
極端な民主化について……38
非組織的な観点について……42
絶対的均等主義について……46
主観主義について……50

個人主義について……53
流賊的思想について……60
盲動主義の残りかすについて……63
自由主義に反対する……65

人民に奉仕する

（一九四四年九月八日）

われわれの共産党と共産党の指導する八路軍、新四軍は革命の部隊である。われわれのこの部隊は、完全に人民を解放するための部隊であり、徹底的に人民の利益のためにはたらく部隊である。張思徳（チャンスートー）同志はわれわれのこの部隊のなかのひとりである。

人はいずれ死ぬものだが、死の意義にはちがいがある。むかし、中国に司馬遷（しばせん）という文学者がいて、「人は

もとより一死あれども、あるいは泰山より重く、あるいは鴻毛より軽し」といった。人民の利益のために死ぬのは、泰山よりも重い。ファシストのために力をつくし、人民を搾取し人民を抑圧するもののために死ぬのは、鴻毛よりも軽い。張思徳同志は人民の利益のために死んだのであって、その死は泰山よりも重い。

われわれは人民に奉仕するものであるから、もし自分に欠点があれば、人から批判され指摘されることをおそれない。どんな人でも指摘してくれてよい。言ってくれたことが正しければ、われわれはあらためる。だされた

方策が人民のためになるなら、われわれはそのとおりにする。「軍隊の精鋭化、行政の簡素化」という意見は、党外の人李鼎銘（リーテインミン）氏がだしたもので、人民のためになるよい意見であるから、われわれは採用した。われわれが、人民の利益のためにあくまでもよいことをつづけ、人民の利益のためにまちがったことをあらためていくかぎり、われわれのこの部隊はきっと栄えるであろう。

われわれは、全国の津々浦々からやってきた。共通の革命の目標をめざして集まったのである。われわれはさらに、全国の大多数の人民とともにこの道をあゆまなけ

ればならない。われわれは、こんにちすでに九千百万の人口をもつ根拠地を指導しているが、これではまだ不十分である。もっと大きくしなければ全民族の解放をたたかいとることはできない。われわれの同志は、困難なときには成果に目をむけ、光明に目をむけ、勇気をふるいたたせなければならない。中国人民はいま苦難のなかにある。われわれにはかれらを救う責任があり、われわれは奮闘努力しなければならない。奮闘すれば犠牲が出ることもあるし、人が死ぬようなこともつねにおこる。だが、人民の利益、大多数の人民の苦しみを考えるなら、人民のために死ぬことは死に場所をえたということになる。ただ、われわれは不必要な犠牲をできるだけ少なくすべきである。われわれの幹部は、一人ひとりの戦士に心をくばらなければならず、革命の部隊のすべてのものは、心をくばりあい、いたわりあい、助けあわなければならない。

今後、われわれの部隊では、だれが死んでも、それが炊事員であろうと兵士であろうと、いくらかでも有益な仕事をしたものであれば、かならずそれを弔い、追悼会をひらかなければならない。これは一つの制度にしてい

かなければならない。この方法は、一般の人びとのあいだにもひろめるべきである。村のものが死ねば、追悼会をひらく。このような方法で、われわれの哀悼の気持ちをあらわし、全人民を団結させるのである。

ベチューンを記念する

（一九三九年十二月二十一日）

ベチューン同志はカナダ共産党員で、五十余歳であった。中国の抗日戦争をたすけるため、カナダ共産党とアメリカ共産党から派遣されて、万里を遠しとせず、中国にこられた。昨年の春延安（イエンアン）につき、そのご五台山（ウータイシャン）にいって活動していたが、不幸にして殉職された。外国人が、少しの利己的な動機もなしに中国人民の解放事業を自分自身の事業としたのは、どういう精神からであろうか。

それは国際主義の精神であり、共産主義の精神であって、中国共産党員の一人ひとりがこのような精神を学ばなければならない。レーニン主義によれば、世界革命の勝利をかちとるには、資本主義国のプロレタリア階級は植民地・半植民地人民の解放闘争を支持し、植民地、半植民地のプロレタリア階級は資本主義国のプロレタリア階級の解放闘争を支持しなければならない。ベチューン同志はこのレーニン主義の路線を実践したのである。われわれ中国共産党員もこの路線を実践しなければならない。われわれはすべての資本主義国のプロレタリア階級と団結し、日本、イギリス、アメリカ、ドイツ、イタリアなどすべての資本主義国のプロレタリア階級と団結しなければならない。そうしてこそ、帝国主義を打倒し、わが民族と人民を解放し、世界の民族と人民を解放することができるのである。これがわれわれの国際主義であり、これがせまい民族主義やせまい愛国主義に反対するわれわれの国際主義である。

ベチューン同志の少しも利己的でなく、ひたすら人につくす精神は、かれの仕事にたいする極度の責任感、同志と人民にたいする極度の熱誠にあらわれている。共産

党員の一人ひとりがかれに学ばなければならない。すくなからぬ人びとは、仕事にたいする責任感がなく、苦しい仕事はさけて楽な仕事をえらび、重い荷物は人におしつけて軽い荷物を自分がかつぐ。なにをするにも、まず自分のためを考え、それから人のことを考える。少しでも仕事をすると、すっかり思いあがって、人が知らないのではないかとこのんでふいちょうする。同志と人民にたいしては、あふれるような熱誠をもって接するのではなく、冷淡そのもので、なんの関心ももたず、まったく無感覚である。このような人は、じつは共産党員ではな

い、すくなくとも純粋の共産党員とはいえない。前線から帰ってきたもので、話がベチューンのことになると、だれひとり敬服しないものはなく、だれひとりかれの精神に感動しないものはない。山西（シャンシー）・察哈爾（チャーハール）・河北（ホーペイ）辺区の軍民のあいだには、直接ベチューン医師の治療をうけたもの、またはベチューン医師の活動を目のあたりにみたもので、感動しないものはない。共産党員の一人ひとりが、ベチューン同志のこのような真の共産主義者としての精神をぜひとも学ばなければならない。

　ベチューン同志は医師であった。かれは医療を職業と

し、技術については、研究のうえにも研究をかさねた。かれの医術は、八路軍の全医務関係者のなかで、とくにすぐれていた。このことも、変わったものをみるとすぐに気うつりする人びとや、技術的な仕事をつまらないものと考えたり、将来性がないと考えたりして、それをみくびる人びとにとって、非常によい教訓である。

わたしは、ベチューン同志と一回あったきりである。そののち、かれはなんども手紙をくれたが、わたしはいそがしかったので、一回しか返事を出さなかった。それもかれがうけとったかどうかわからない。かれの死を、わたしは非常に悲しんでいる。いま、人びとはかれを記念しているが、これをみても、かれの精神がどんなにふかく人びとを感動させているかがわかる。われわれは、みな、かれの少しも私利私欲のない精神を学ばなければならない。この点から出発すれば、大いに人民に役だつ人となることができる。人の能力には大小のちがいがあるが、この精神さえ持っていれば、それは高尚な人であり、純粋な人であり、道徳的な人であり、低級な趣味からぬけだした人であり、人民にとって有益な人である。

愚公、山を移す

（一九四五年六月十一日）

われわれは、りっぱな大会をひらくことができた。われわれは、つぎの三つのことをした。第一は、党の路線をきめたこと、すなわち、おもいきって大衆を立ちあがらせ、人民の力を強大にして、わが党の指導のもとに、日本侵略者をうちやぶり、全国人民を解放し、新民主主義の中国を樹立するという路線をきめたことである。第二は、新しい党規約を採択したことである。第三は、党

の指導機関——中央委員会を選出したことである。今後の任務は、全党を指導して党の路線を実現することである。われわれの大会は、勝利の大会であり、団結の大会であった。代表諸君は、三つの報告にたいしてたいへんよい意見をだした。多くの同志は、自己批判をおこない、団結の目標から出発し、自己批判をへて、団結にたっした。今回の大会は、団結の手本であり、自己批判の手本であり、また党内民主主義の手本であった。

大会が終われば、多くの同志は自分の持ち場に帰り、それぞれの戦場におもむくことになる。同志諸君は、各

地にいったら、大会の路線を宣伝し、また全党の同志をつうじて、広く人民にこれを説明しなければならない。

われわれが大会の路線を宣伝するのは、全党と全国人民に、革命はかならず勝利するという確信をもたせるためである。なによりもまず前衛に、決意をかため、犠牲をおそれず、あらゆる困難を克服して、勝利をたたかいとるよう自覚させるべきである。だが、それだけではまだ不十分であって、さらに、全国の広範な人民大衆に、心からすすんでわれわれとともに奮闘し、勝利をたたかいとるよう自覚させなければならない。中国は反動派の

ものではなく、中国人民のものであるという確信を、全国人民にもたせるべきである。中国には、むかし、「愚公、山を移す」という寓話があった。その話というのは、むかし、華北に住んでいた北山の愚公という老人の物語である。老人の家の南側には、太行山(タイハンシャン)と王屋山(ワンウーシャン)という二つの大きな山があって、家に出入りする道をふさいでいた。愚公は、息子たちをひきつれ、くわでこの二つの大きな山をほりくずそうと決意した。智叟という老人がこれをみてふきだし、こういった。お前さんたち、そんなことをするのは、あまりにもばかげているじゃな

いか、お前さんたち親子数人で、こんな大きな山を二つもほりくずしてしまうなんてとてもできゃあしないよ、と。愚公は答えた。わたしが死んでも息子がいるし、息子が死んでも孫がいる、子々孫々と絶えることがないのだ。この二つの山は高いけれども、これ以上高くなりはしない。ほればほるだけ減るのだから、どうしてほりくずせないことがあろうか、と。愚公は智叟のあやまった考えを反ばくし、すこしも動揺しないで、毎日、山をほりつづけた。これに感動した上帝は、ふたりの神を下界におくって、二つの山を背負いさらせたというのであ

る。いま、中国人民の頭上にも、やはり帝国主義と封建主義という二つの大きな山がのしかかっている。中国共産党ははやくから、この二つの山をほりくずしてしまおうと決意している。われわれは、かならずやりぬき、たえまなく働きつづける。そうすればわれわれも上帝を感動させるであろう。この上帝とはほかならぬ全中国の人民大衆である。全国の人民大衆が、いっせいに立ちあがって、われわれといっしょにこの二つの山をほるなら、どうしてほりくずせないことがあろうか。

きのう、わたしは帰国する二人のアメリカ人にこういった。アメリカ政府はわれわれを破壊しようとしているが、これはゆるせない。われわれは、アメリカ政府の援蔣反共政策に反対する。だが、われわれは、第一に、アメリカ人民とかれらの政府とを区別し、第二に、アメリカ政府内の政策決定者と下部の一般職員とを区別するものである。わたしはこの二人のアメリカ人につぎのようにいった。あなたがたアメリカ政府の政策決定者につたえなさい。わが解放区は諸君がそこにはいるのを禁止する。なぜなら、諸君の政策が援蔣反共で、われわれは気がゆるせないからである。もし諸君が日本と戦うために

解放区にはいるのならよいが、ただ、とりきめを結んでおかなければならない。もし諸君がこそこそとやたらに歩きまわるならば、それはゆるせない。ハーレーはすでに公然と、中国共産党とは協力しないと言明している。それなのに、どうしてわれわれの解放区にきて、やたらに歩きまわろうとするのか。

　アメリカ政府の援蔣反共政策は、アメリカ反動派の凶暴さを物語っている。だが、中国人民の勝利をはばもうとするあらゆる内外反動派のくわだては、すべて失敗を運命づけられている。いまの世界の流れは、民主主義が

主流であり、反民主主義的反動は逆流にすぎない。当面、反動の逆流が民族独立と人民民主主義の主流を圧倒しようとくわだてているが、反動の逆流は、結局、主流になることはありえない。スターリンがはやくからのべているように、いまなお、旧世界にはつぎの三つの大きな矛盾がある。第一は、帝国主義国におけるプロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾、第二は、帝国主義国間の矛盾、第三は、植民地・半植民地国と帝国主義宗主国との矛盾である。この三つの矛盾は、依然として存在しているばかりでなく、いっそう鋭くなり、いっそう拡

大している。これらの矛盾が存在し、発展しているので、反ソ・反共・反民主主義の逆流があっても、このような反動の逆流はいつかはかならず粉砕されるのである。

いま、中国では二つの大会がひらかれている。一つは国民党の第六回代表大会、一つは共産党の第七回代表大会である。二つの大会はまったく異なった目的をもっている。一つは、共産党と中国の民主主義勢力を滅ぼして、中国を暗黒にみちびくものであり、一つは、日本帝国主義およびその手先である中国の封建勢力をうちたおして、新民主主義の中国を建設し、中国を光明にみちびくものである。この二つの路線はたがいにたたかっている。われわれは、中国人民が中国共産党の指導のもとに、中国共産党第七回大会の路線にみちびかれて完全な勝利をかちとること、そして、国民党の反革命路線がかならず失敗することをかたく信ずるものである。

党内のあやまった思想の是正について

（一九二九年十二月）

赤軍第四軍の共産党組織内にはさまざまな非プロレタリア思想が存在しており、党の正しい路線を遂行するうえできわめて大きな障害となっている。これを徹底的に是正しなければ、中国の偉大な革命闘争が赤軍第四軍にあたえている任務はになえなくなるにちがいない。第四軍の党内のさまざまな正しくない思想の根源は、もちろ

ん、党の組織的基礎のもっとも大きな部分が農民とその他の小ブルジョア階級の出身者によって構成されていることにある。しかし、党の指導機関がこれらの正しくない思想にたいして、一致した断固たる闘争をおこなわず、党員にたいして正しい路線の教育をおこなわなかったことも、これらの正しくない思想を存在させ、はびこらせている重要な原因である。大会は党中央の九月の書簡の精神にもとづいて、第四軍の党内のさまざまな非プロレタリア思想のあらわれ、その根源およびそれを是正する方法を指摘し、同志諸君がこれを徹底的に一掃するために立ちあがるようよびかける。

軍事一点ばりの観点について

軍事一点ばりの観点が赤軍の一部の同志のあいだに、非常にはびこっている。それはつぎのような点にあらわれている。

（一）軍事と政治は対立するものだと考え、軍事は政治的任務を完遂する道具の一つにすぎないということを認めない。それどころか、「軍事がよければ、政治は自然によくなる、軍事がわるければ、政治もわるいはず

だ」というものさえいるが、これはさらに一歩すすんで、軍事が政治を指導すると考えるものである。

（二）赤軍の任務も白軍のそれと似たようなもので、ただたんに戦争をするだけだとおもっている。中国の赤軍は革命の政治的任務を遂行する武装集団であることを知らない。とくに現在では、赤軍は、けっしてたんに戦争をするだけではなく、戦争で敵の軍事力を消滅するほかに、なお大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装化し、大衆の革命政権の樹立をたすけることから、共産党の組織をうちたてることまでのさまざまの重大な任務を

になっている。赤軍が戦争するのは、たんに戦争のために戦争するのではなくて、大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装化し、また大衆の革命政権の樹立をたすけるために戦争するのであり、大衆にたいする宣伝、組織、武装化および革命政権樹立などの目標をはなれては、戦争することの意義がうしなわれ、また赤軍存在の意義もうしなわれるのである。

（三）したがって、組織のうえでは、赤軍の政治機関を軍事機関に従属させ、「軍外活動も司令部で」というスローガンをもちだしている。このような思想が発展し

ていけば、国民党軍隊が軍閥主義の道をたどっているのとおなじように、大衆からはなれ、軍隊で政権を制御し、プロレタリア階級の指導からはなれる危険な道を歩むことになる。

（四）同時に、宣伝活動のうえでは、宣伝隊の重要性を無視している。大衆を組織するうえでは、軍隊内の兵士委員会の組織を無視し、また地方の労農大衆を組織することを無視している。その結果、宣伝活動と組織活動が、すべて解消された状態になっている。

（五）戦いに勝てばいばりかえり、戦いに負ければし

ょげかえる。

（六）本位主義、すなわち地方の大衆を武装化することが赤軍の重要な任務の一つであることを知らず、あらゆることを、ただ第四軍のためだけから考える。これは拡大された小集団主義である。

（七）少数の同志たちは、第四軍の局部的な環境にとらわれ、ここ以外には、ほかに革命勢力はないもののように考えている。そのために、実力を保存し、闘争をさけようとする思想が非常に濃厚である。これは日和見主義の残りかすである。

（八）主体的、客観的条件を無視し、革命のせっかち病にかかり、労苦にたえて、きめのこまかい、地味な大衆活動をやろうとせず、はでにやることばかり考え、幻想でいっぱいになっている。これは盲動主義の残りかすである。

軍事一点ばりの観点の根源

（一）政治的水準が低い。したがって、軍隊内の政治指導の役割を知らず、赤軍は白軍と根本的にちがったものであることを知らない。

（二）やとい兵の思想。たびたびの戦いで捕虜が非常に多く、こうしたものが赤軍にくわわり、濃厚なやとい兵の思想をもちこんできたので、軍事一点ばりの観点は下層において基盤をもつようになった。

（三）以上の二つの原因によって、第三の原因がうまれている。すなわち軍事力を信じすぎて、人民大衆の力を信じないことである。

（四）党が軍事活動にたいして積極的に心をそそがず、討議をおこなわなかったことも、一部の同志が軍事一点ばりの観点をもつようになった原因である。

是正の方法

（一）教育をつうじて、党内の政治的水準を高め、軍事一点ばりの観点の理論的根源を一掃し、赤軍と白軍との根本的なちがいをはっきり理解させる。同時に、日和見主義と盲動主義の残りかすを一掃し、第四軍の本位主義をうちやぶる。

（二）将兵の政治的訓練を強化し、とくに捕虜出身者にたいする教育を強化する。同時に、組織の面から、軍事一点ばりの観点の根源をよわめ、とりのぞくために、できるかぎり地方政権機関が闘争経験をもった労働者や農民をえらんで赤軍に参加させるようにする。

（三）赤軍内の党組織や赤軍将兵に影響をあたえるために、赤軍内の党組織にたいする地方の党組織の批判や、赤軍にたいする大衆政権機関の批判をおこさせていく。

（四）党は軍事活動にたいして積極的に心をそそぎ、討議をおこなう。すべての活動は、党が討議し、決定したのち、大衆をつうじて実行にうつす。

（五）赤軍にかんする法規を制定し、赤軍の任務、軍事の系統と政治の系統との関係、赤軍と人民大衆との関係、兵士委員会の権限・機能およびそれと軍事・政治機

関との関係をはっきり規定する。

極端な民主化について

赤軍第四軍が党中央の指示をうけてから、極端な民主化の現象はだいぶすくなくなった。たとえば、党の決議はわりあいよく実行されるようになった。赤軍内でいわゆる「下から上への民主集権制」とか、「まず下級に討議させ、それから上級で決議せよ」とかいったことの実行を要求するあやまった主張をもちだすものは、もういなくなった。だが、実際には、このような減少も一時的な、表面的な現象にすぎず、極端な民主化の思想が一掃されたのではない。つまり、極端な民主化の根が多くの同志の思想のなかにまだ深く食いこんでいる。たとえば、決議の実行にあたって示されるさまざまなふしょうぶしょうの態度は、その証拠である。

是正の方法

(一) 理論のうえで極端な民主化の根をとりのぞく。まず第一に、極端な民主化の危険は、党の組織を傷つけ、さらにそれを完全に破壊し、党の戦闘力を弱め、さらにそれを完全に壊滅させて、党が闘争の責任をおえな

いようにし、それによって革命の失敗をまねく、という点にあることを指摘しなければならない。そのつぎには、極端な民主化の根源が小ブルジョア階級の自由放漫性にあることを指摘しなければならない。このような自由放漫性が党内にもちこまれると、政治上、組織上の極端な民主化の思想になる。このような思想はプロレタリア階級の闘争任務と根本的に相いれないものである。

（二）組織のうえでは、集中的指導のもとでの民主的生活を厳格におこなう。その路線はつぎのとおりである。

1　党の指導機関は正しい指導路線をもち、問題があれば解決策をうちだす。こうすることによって、指導の中核を確立していく。

2　上級機関は下級機関の状況や大衆生活の状況をはっきりつかみ、それを正しい指導の客観的基礎とする。

3　党の各級機関は、問題を解決するにあたって、軽はずみにやってはならない。いったん決議となった以上は、断固として実行する。

4　上級機関の決議のうち、すこしでも重要なものは、すみやかに下級機関と党員大衆につたえなければな

らない。そのやりかたとしては、活動者会議をひらくか、細胞会議ないし縦隊の党員総会をひらくかして（条件がゆるすかどうかを見たうえで）、それに人をおくり、説明させることである。

5　党の下級機関や党員大衆は、上級機関の指示の意義を徹底的に理解し、その実行方法を決定するために、指示をくわしく討議する。

非組織的な観点について

第四軍の党内に存在している非組織的な観点は、つぎのような点にあらわれている。

イ　少数が多数にしたがわない。たとえば、少数者はその提案が否決されると、心をうちこんで党の決議を実行しようとしない。

是正の方法

（一）会議では、出席者にできるかぎり意見をのべさせる。論争になった問題については、調停したり、いいかげんにすませたりするのではなく、是非をはっきりさせる。一回で解決できない問題は、はっきりした結論をひきだすよう、もういちど討議する（仕事をさまたげな

いことを条件として）。

（二）党の規律の一つは少数が多数にしたがうことである。少数者は自分たちの意見が否決されたばあいには、多数で採択した決議をまもらなければならない。必要があれば、つぎの会議で再討議を提案することはゆるされるが、それ以外に、行動のうえではどのような反対の態度をも示してはならない。

ロ　非組織的な批判

（一）党内批判は党の組織を強固にし、党の戦闘力をつよめる武器である。だが、赤軍の党内の批判は一部がそうではなく、個人攻撃になっている。その結果は、個人をそこなうだけでなく、党の組織をもこわしている。これは小ブルジョア個人主義のあらわれである。これを是正する方法は、党員に、批判の目的は階級闘争の勝利を達成するために党の戦闘力をつよめることにあるのであって、批判を個人攻撃の道具に利用してはならないということを、はっきり理解させることである。

（二）多くの党員は党内では批判せずに、党外で批判している。これは、一般党員がまだ党の組織（会議など）の重要性を理解していず、批判は組織の内部でやっ

ても組織の外部でやっても、なんらちがいはないものと考えているからである。これを是正する方法は、党員に、党の組織の重要性を理解させ、党委員会または同志にたいして批判することがあれば、党の会議でだすべきだということを理解させるように教育することである。

絶対的均等主義について

赤軍内で絶対的均等主義がひどくはびこった時期がある。たとえば、負傷兵に手当を支給するにも、軽傷か重傷かによって区別をつけることに反対し、均等に支給することを要求する。上官が馬に乗るのは、職務の必要からだとは考えず、不平等な制度だと考える。物を支給するにも極端な均等割りを要求し、特別の事情のあるところにすこし多く支給してやることも喜ばない。米をはこぶにしても、大人も子供も、体が強くても弱くても、均等にもたせようとする。宿営するにも部屋は均等にわりあてるよう要求し、司令部がすこしばかり大きな部屋にはいっても、すぐに文句をいう。勤務のわりあても同等であることを要求し、すこしでもよけいにやることは承知しない。それればかりか、担架が一台で負傷兵が二人い

るといったばあい、一人しかはこべないようなら、いっそ二人ともはこばせない。これらはみな赤軍将兵のあいだの絶対的均等主義がなおひどいものであることを証明している。

絶対的均等主義の根源は、政治上の極端な民主化とおなじように、手工業と小農経済にあり、ただ一方は政治生活の面にあらわれ、一方は物質生活の面にあらわれただけである。

是正の方法。絶対的均等主義は、資本主義がまだ消滅しない時期には、たんに農民や小所有者の幻想にすぎな

いばかりでなく、社会主義の時期でも、物資の分配は「各人は能力におうじてはたらき、労働におうじて報酬をうける」という原則と仕事の必要におうじておこなわれるのであって、けっして絶対的な均等といったものではないことを、指摘しなければならない。赤軍内の物資の支給は、将兵の給与を平等にしているように、だいたいにおいて均等にすべきである。というのは、現在の闘争の条件がそう要求しているからである。しかし、すべての理由をぬきにした絶対的均等主義には反対しなければならない。なぜなら、これは闘争に必要なことではなく、ま

さにその反対に、闘争をさまたげるものだからである。

主観主義について

主観主義は、一部の党員のあいだに濃厚に存在しているが、これは政治情勢の分析にとっても活動の指導にとっても、非常に不利である。なぜなら、政治情勢にたいする主観主義的な分析や活動にたいする主観主義的な指導は、必然的に日和見主義か、さもなければ盲動主義の結果をうむからである。党内の主観主義的な批判、根拠のないおしゃべり、あるいはおたがいの邪推は、とかく党

内の無原則的な紛糾をかもしだし、党の組織を破壊する。

党内批判の問題についてもう一つふれなければならない点は、一部の同志の批判が小さなところにだけ目をむけ、大きなところには目をむけないことである。かれらには、批判の主要な任務が政治上のあやまりと組織上のあやまりの指摘にあることがわからない。個人的な欠点については、それが政治的なあやまりや組織的なあやまりとかかわりがなければ、同志たちをどうしてよいかわからなくさせるほど多く指摘する必要はない。そのうえ、このような批判が高じてくると、党内の注意力は完

全に小さな欠点に集中され、人びとは小心翼々とした君子に変わってしまい、党の政治的任務を忘れることになる。これは大きな危険である。

是正の方法。主として、党員の思想や党内の生活を政治的にし、科学的にするように党員を教育することである。この目的を達成するためには、つぎのことが必要である。（一）主観主義的な方法によって政治情勢の分析や階級勢力の評価をおこなうのではなくて、マルクス・レーニン主義の方法によって分析や評価をおこなうように党員を教育する。（二）党員に、社会・経済の調査や

研究に目をむけさせ、それによって闘争の戦術や活動の方法をきめさせ、同志たちに実際状況の調査をはなれると空想や盲動のどろぬまにはまりこんでしまうことをわからせる。（三）党内批判にあたっては、主観的な独断や批判の卑俗化を防がなければならず、発言するにはよりどころを重んじ、批判するには政治的な面に目をむけなければならない。

個人主義について

赤軍の党内の個人主義的偏向は、つぎのようないろい

ろな点にあらわれている。

（一）報復主義。党内で兵士の同志から批判されると、党外で機会をとらえて報復する。なぐったり、どなりつけたりするのが、報復の一つの手段である。党内でも、この会議でおれを批判したからつぎの会議ではおまえのあらをさがして仕返ししてやるというように、報復をはかる。このような報復主義は、まったく個人的見地からでたもので、階級の利益や全党の利益がぜんぜん念頭にない。その目標は敵階級にあるのではなくて、自分の陣営内の他の個人にある。これは組織を弱め、戦闘力を弱める腐食剤である。

（二）小集団主義。全体の利益には目をむけず、自分の所属する小集団の利益に目をむけるだけである。表面的には、個人のためということではないが、実際にはきわめてせまい個人主義をふくんでおり、おなじように、大きな腐食作用と遠心作用をもっている。赤軍内には、これまで小集団的な気風がひどかったが、批判がおこなわれて、いまは多少よくなってきた。しかし、その残りかすは依然として存在しており、さらにその克服につとめなければならない。

（三）やとわれ人的思想。党も赤軍も革命の任務を遂行する道具であり、自分はそのうちの一員であることを理解しない。自分が革命の主体であることを理解せず、ただ上官個人に責任をおうだけで、革命にたいして責任をおうのではないと考える。やとわれて革命をやるという、こうした消極的な思想は、やはり一種の個人主義のあらわれである。やとわれて革命をやるという思想は、無条件に努力する積極的な活動家のあまり多くないことの原因になっている。やとわれ人的思想を一掃しなければ、積極的な活動家をふやすことはできず、革命の重責はいつでも少数のものの肩にかかり、闘争にとってきわめて不利である。

（四）享楽主義。これは個人主義が享楽面にあらわれたもので、赤軍内にもそういう人がすくなくない。かれらはつねに部隊が大きい都市にいくことを望んでいる。かれらが大きい都市へいきたがるのは活動のためではなく、享楽のためである。かれらがもっとも好まないのは生活の苦しい赤色地域内で活動することである。

（五）消極的で、なまけること。すこしでも思うようにいかないと、すぐ消極的になり、仕事をしなくなる。

その原因はおもに教育の欠けていることにあるが、また、指導者の問題の処理や仕事の配分や規律の執行が妥当でないことにもよる。

（六）部隊をはなれたがる思想。赤軍のなかには、部隊をはなれて地方の仕事にまわることを要求するものが日ましにふえている。その原因はすべて個人的にあるのではない。そのほか、一、赤軍の物質生活がわるすぎること、二、長いあいだのたたかいで疲れを感じていること、三、指導者の問題の処理や仕事の配分や規律の執行が妥当でないことなども原因になっている。

是正の方法。主として思想の面から個人主義を是正するよう教育を強化する。つぎに問題の処理、仕事の配分、規律の執行を適切にすることである。そして、赤軍の物質生活を改善するよう方法を講じなければならない。それには、あらゆる可能な機会を利用して休息、整備することによって物的条件を改善することである。個人主義の社会的根源は、小ブルジョア階級およびブルジョア階級の思想が党内に反映していることにあり、教育をおこなうにあたっては、この点を説明しなければならない。

流賊的思想について

赤軍内にルンペン出身者が大きな数をしめていることや、全国、とくに南部の各省に広範なルンペン大衆がいることから、赤軍内に流賊主義的な政治思想がうまれている。この思想はつぎの点にあらわれている。一、骨のおれる活動をつうじて根拠地を創設し、人民大衆の政権を樹立し、またそれによって政治的影響を拡大しようとせず、ただ流動的な、遊撃的な方法によって政治的影響を拡大しようと考えるだけである。二、赤軍を拡大するのに、地方赤衛隊や地方赤軍の拡大をつうじて主力赤軍を拡大させるという路線をとろうとせず、「兵馬をつのり」、「寝返り兵、投降兵をかかえこむ」路線を歩もうとする。三、大衆といっしょに困難なたたかいをする辛抱づよさがなく、大きな都市にいって大いに食ったり飲んだりすることばかり考えている。すべてこうした流賊的思想のあらわれは、赤軍の正しい任務の遂行をひどくさまたげており、したがって、流賊的思想を一掃することは、じつに赤軍の党内の思想闘争の重要な目標の一つである。歴史上の黄巣、李闖(りちん)式の流賊主義は、もはやこ

んにちの環境ではゆるされないことを知るべきである。

是正の方法

（一）教育を強化して、正しくない思想を批判し、流賊主義を一掃する。

（二）現在の赤軍の基本部隊とあらたに参加した捕虜出身の兵士にたいして、ルンペン意識とたたかうための教育を強化する。

（三）闘争経験をもった労働者、農民の活動家を赤軍部隊に参加させて、赤軍の階級構成を変える。

（四）たたかう労農大衆のなかから新しい赤軍部隊をつくりだす。

盲動主義の残りかすについて

赤軍の党組織では、これまで盲動主義にたいして闘争がおこなわれてきたが、まだ不十分である。したがって、赤軍内にはまだ盲動主義思想の残りかすがある。それはつぎの点にあらわれている。一、主体的条件および客観的条件を無視して、めくらめっぽうに行動する。

二、都市政策が十分に、断固として実行されていない。

三、軍紀がゆるんでおり、とくに戦いにやぶれたときが

そうである。四、一部の部隊にはまだ家屋を焼き払う行為がある。五、逃亡兵を銃殺する制度や体刑制度も、盲動主義の性質をおびている。盲動主義の社会的根源はルンペン・プロレタリアの思想と小ブルジョア階級の思想との総合にある。

是正の方法

（一）思想の面から盲動主義を一掃する。

（二）制度と政策の面から盲動的な行為を是正する。

自由主義に反対する

（一九三七年九月七日）

われわれは積極的な思想闘争を主張する。なぜなら、それは、党内および革命団体内の団結を実現してたたかいを有利にする武器だからである。共産党員と革命家は一人ひとりがこの武器を手にしなければならない。

ところが、自由主義は、思想闘争を解消し、無原則的な平和を主張する。その結果、腐敗した卑俗な作風がうまれ、党と革命団体内の一部の組織、一部の人を政治的

に堕落させる。

自由主義はいろいろな形であらわれる。

知人、同郷、同窓、親友、親近者、旧来の同僚、旧来の部下であることから、おだやかさとむつまじさを保とうとして、まちがっていることがはっきりわかっていても、かれらと原則上の論争をおこなわず、なすがままにまかせる。あるいは、なごやかな空気を保とうとして、うわべのことをいうだけで、徹底的な解決をはからない。その結果、団体にも害をあたえ、個人にも害をあたえる。これが第一の型である。

組織に積極的に提案するのではなく、かげで無責任な批判をする。面とむかってはいわずに、かげであれこれいい、会議の席ではいわずに、会議がすんだあとであれこれいう。集団生活の原則などは念頭になく、ただ自由放任があるだけである。これが第二の型である。

自分にかかわりのないことはほうっておき、まちがっていることがはっきりわかっていても、口にださない方が得だと考え、りこうに保身をはかり、あやまちのないことだけをねがう。これが第三の型である。

命令には服従せず、個人の意見を第一にする。組織に

世話はしてもらいたいが、規律はごめんだという。これが第四の型である。

団結のため、進歩のため、ことをうまくはこぶために、正しくない意見と闘争し、論争するのではなくて、個人攻撃をし、意地をはり、私憤をはらし、報復をはかる。これが第五の型である。

正しくない議論をきいても論ばくせず、反革命分子の話をきいてさえ報告せず、なにごともなかったかのように平然としている。これが第六の型である。

大衆に接して、宣伝もせず、扇動もせず、演説もせず、調査もせず、事情も聞かず、大衆の苦楽に関心もよせずに知らぬ顔をし、自分が共産党員であることをわすれて共産党員を普通の民衆と混同する。これが第七の型である。

大衆の利益をそこなう行為を見て憤慨もせず、忠告もせず、制止もせず、説得もせず、そのままほうっておく。これが第八の型である。

なにごとをやるにもふまじめで、一定の計画をもたず、一定の方向をもたず、いいかげんにすませ、その日暮らしをし、坊主になればなっているあいだだけ鐘をつ

く。これが第九の型である。

自分では革命にたいして功労があると思いこみ、先輩かぜをふかせ、大きな事はやれないくせに小さな事はやらず、仕事はだらしがなく、学習はずぼらである。これが第十の型である。

自分がまちがっており、しかもそれを知っていながら、あらためようとせず、自分にたいして自由主義をとる。これが第十一の型である。

このほか、まだいくつかあげることができるが、おもなものはこの十一の型である。

これらはすべて自由主義のあらわれである。

革命的な組織のなかでの自由主義は、きわめて有害なものである。それは団結をよわめ、結びつきをゆるめ、活動を消極的にし、意見の不一致をもたらす腐食剤である。それは革命の隊列に厳密な組織と規律をうしなわせ、政策の徹底的遂行を不可能にし、党の組織を党の指導する大衆から遊離させる。これはゆゆしい悪質な偏向である。

自由主義の根源は、個人の利益を第一におき、革命の利益を第二におく小ブルジョア階級の利己心にあり、そ

こから思想上、政治上、組織上の自由主義がうまれる。

自由主義者は、マルクス主義の原則を抽象的な教条としてみている。かれらは、マルクス主義には賛成するが、それを実行しようとしないか、あるいは完全には実行しようとせず、マルクス主義をもって自分の自由主義ととりかえようとしない。これらの人びとは、マルクス主義ももっているが、自由主義ももっている。言うことはマルクス主義だが、行なうことは自由主義であり、人にたいしてはマルクス主義だが、自分にたいしては自由主義である。二種類の品物をとりそろえていて、それを

つかいわける。これが一部の人びとの思想方法である。

自由主義は日和見主義の一つのあらわれであり、マルクス主義と根本的に衝突するものである。それは消極的なものであり、客観的には敵をたすける役割をするので、敵はわれわれの内部に自由主義が保存されることをよろこぶ。自由主義はこういう性質のものであるから、革命の隊列内にその存在の余地をのこしてはならない。

われわれは、マルクス主義の積極的な精神によって、消極的な自由主義を克服しなければならない。共産党員

は、気持ちが率直で、忠実で、積極的で、革命の利益を第一の生命とし、個人の利益を革命の利益にしたがわせなければならず、党の集団生活をつよめ、党と大衆との結びつきをつよめるように、いつ、どこででも、正しい原則を堅持し、すべての正しくない思想や行動とうむことなく闘争しなければならず、個人よりも党と大衆に、自分よりも他人に、いっそう関心をよせなければならない。それでこそ共産党員といえるのである。

　忠実な、率直な、積極的な、厳正なすべての共産党員は団結して、一部の人びとの自由主義的な偏向に反対し、かれらを正しい方向にむかわせよう。これは思想戦線における任務の一つである。

毛主席の五篇の著作

*

1972年　　　出版発行
出版者　外 文 出 版 社　（北京）
発行者　中国国際書店
編号：（日）1050—1064
定 価 40 円
1—J—911 Pk
00023